3Dプリンターで作ることができる「本当に使える銃」のデータ配布をめぐる各国の報道比較

メディア発表グループB
楠木、富樫、渡辺、入江、碓井

背景

研究手法

- アメリカ、イギリス、ドイツ、日本の
主要新聞（発行部数の多いもの）の比較研究

- 報道日時、報道に割かれるページ数、論調などを相対化することで、各国におけるこの問題の扱われ方と論点を比較し、
各国の、当問題をめぐる文化的背景の差異を明らかにする

	日本①	日本②	アメリカ	イギリス「The Guardian」	ドイツ①	ドイツ②
初めて報道された日付				2013年5月7日		
面				ニュース面3ページ		
論調（主観・客観）				客観的		
報道形態（事実・意見）				事実報道、問題提起		
キーワード				Defence Distributed、US, plastic hand gun		
タイトル（原文）				Ready,print, fire-plans for gun from 3D printer to be published online		

イギリス

イギリス「The Guardian」

- 前提：イギリスには全国紙は存在しない。

※階級ごととに読む新聞が分かれており、労働者階級が読むタブロイド紙、
知識階級が読むクオリティーペーパーと分かれている。

※発行部数はタブロイド紙の方が圧倒的だが、ゴシップや不確定な情報も含まれるため、今回はクオリティーペーパーの中で発行部数の多い「The Guardian」を対象とした。

タイトル：

Ready, print, fire

-plans for gun from 3D printer to be published online

⇒「3Dプリンターで作る銃がオンラインで配布される」

日本語の「よーい、ドン」にあたる、「Ready, set, go」に合わせたタイトル。
とてもなじみやすく、キャッチー。

イギリス「The Guardian」

- 日付：2013年５月７日
- 何面：３ページ、ニュース面
- 記事の論調・報道携帯

テキサスで3Dプリント銃が火を噴く実験が行われた、という情報から始まる、客観的、中立的な事実報道。アメリカの銃規制について言及。自国との関連性については言及せず。

- キーワード：

Defence Distributed(3D銃を使った実験を行ったグループ),US,plastic hand gun

- ここに一枚あとで紙面のスキャンデータ足すよ

イギリス「The Guardian」考察

Q.1　なぜイギリスは、この報道を規制の面から捉えた記事を書いたのか。

Q.2　なぜ3ページという注目される場所に記事がありながら、自国（イギリス）との関連性に全く触れないのか。

【考察】

・イギリスの銃規制の法律の在り方を参照したため。

（銃の脅威からどのように公共の安全を保障することができるか、そしてどのように銃による死傷事件を防げるかという観点に主眼を置いた内容となっている。英国には米国の全米ライフル協会 (NRA) のような強力な圧力団体が存在しないため、銃規制賛成派と銃の所持賛成派による活発な議論も見られない。これらの理由から英国の銃規制は日本とともに世界でも類まれなる厳しさを誇る。）

・客観的でありながら、読者にとって身近な事件として報道したいという趣旨があったため。

ドイツ

ドイツ　ディヴェルト

- タイトル:

  「武器の印刷。アメリカの法学部学生Cody Wilsonが3Dプリンターの銃を発明。アメリカ政府が懸念」
- 日付:５月１３日
- パノラマ面
- 報道形態、論調:

  とても主観的。この3Dの銃の設計図の発表に対して、危機感を持っており、「未だに最前の改善策はない、大きな戦いである」などと報道。
- キーワード:「福祉国家、新自由主義、保守主義、左翼」など、政治的用語が多い。

ドイツ　ディヴェルト　考察

- Q：世間ではこの設計図の発表に関して「問題ない」という見方も多い中、なぜ「かなり危惧している」という論調で報道されているのか。
- 考察

①この新聞紙が保守的であるため。

②ドイツ国内でのダウンロードが多いため。

③この技術によって銃だけではなく、軍用部品やドラッグ、科学兵器の製造の可能性も報じられており、ドイツは第一次世界大戦時に塩素ガスにより大きな被害を受けており、万が一の場合を危惧しているのでは。